

催し物案内

4/14(日) 第13回 柏木隆雄文芸講演会 (主催事業)

島崎藤村とジャン＝ジャック・ルソー  
—ルソー『告白』がもたらしたもの—

今春も柏木隆雄先生の文芸講演会を放送大学三重学習センターの共催を得て、下記のように開催します。一般公開、入場無料です。お誘い合わせてご来場ください。

日時 4月14日(日) 14時～16時  
会場 三重県総合文化センター・生涯学習センター視聴覚室  
講師 柏木隆雄先生 (大手前大学学長・フランス文学、松阪市出身)

<講師のひとこと>

ルソーの『告白』を中心とする自伝は19世紀以降の近代文学の一つの方向を決定づけた、とされています。日本の自然主義を牽引した島崎藤村が、ルソーに多くを得ていることは知られていますが、『破戒』その他、藤村の作品におけるルソーの影を辿ってみたいと思います。>

5/13～ 2013年度フランス語入門講座

今年もダメム先生の指導による入門講座を、津市の第1ビルで5月13日から毎週月曜日、全8回のコースで開催します。詳細お問い合わせは：090-4867-1476 (滝澤) まで。

6/9(日) ハープとサクソフォンによる パラミタコンサート

日時 6月14日(日) 14時開演  
会場 パラミタ・ミュージアム (菰野町・059-391-1088)  
出演 荒木まどか (ハープ・三重日仏協会会員)  
西田歩美 (サクソフォン 2004年国際コンクールで仏国内管楽器部門1位)  
演奏曲目 ドビュッシー：「美しき夕暮れ」他チャイコフスキー、ピアソラなどの作品  
入場料 パラミタ美術館の入場料で聴くことができます。

<初夏の昼下がり、二つの楽器のやわらかな音色をお楽しみください>

6/18(火) 菅原美枝子 室内楽の夕べ (後援事業)

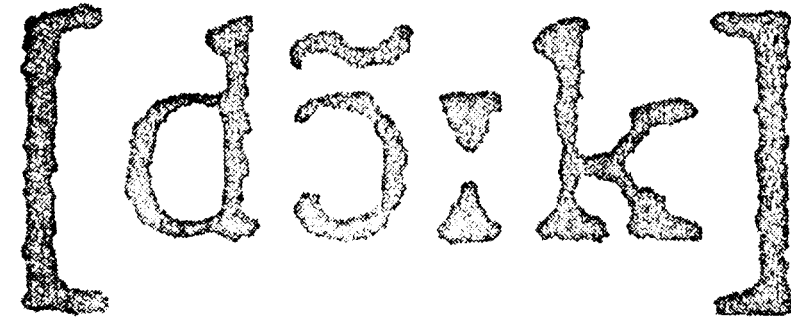
日時 6月18日(火) 19時開演  
会場 津リージョンプラザお城ホール  
出演 菅原美枝子 (ピアノ 三重日仏協会会員)  
竹田千波 (ヴァイオリン) 紫藤祥子 (ヴィオラ) 酒井直 (チェロ)  
演奏曲目 フォーレ：ピアノ四重奏第1番 ショパン：チェロソナタ ト短調 他  
入場料 3,000円 (全自由席)

なお6月26日には名古屋・電気文化会館ホールで同じプログラムで開催されます。

予告 .....

第3回「渚のサロン」5月中旬ごろに

津市阿漕浦海岸のグリソンビルをお借りして開かれている「渚のサロン」、次回は大阪文学学校講師の佐伯晋さんによる『ノーベル文学賞よもやま話』を予定。日時、参加費など詳細は本会HP、または：getz-evans1964@rmail.plala.or.jp まで。



DONC どんく

N°97 avril 2013 SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

発行

三重日仏協会

SOCIETE FRANCO-JAPONAISE DE MIE

〒514-0006 津市広明町418  
418, Komei-cho Tsu-shi  
TEL 059-226-2766  
FAX

グループ紹介 (III)

14年続いている原典読書会  
「お勉強」前後の雑談も楽しみ

1999年総会、バルザック<ファチーノ・カーネ>についての柏木先生の記念講演に触発され、これくらいの長さの作品なら我々でも原典で読めるのではないかと有志で挑戦したのがはじまりで、以来この読書会は月1回のペースでなんと14年目に入りました。先生もおらず、みんなであれこれ論じ合いながら、なんとか作品の心に迫っているのではないかと自ら納得。メンバーは「卒業者」など入れ替わりもありましたが、常時6~7人、最近また二人の大型新人も加わりました。これまで読んだ作品は、バルザックの<ファチーノ><知られざる傑作>、ヴェルコール<海の沈黙>のほか、ドーデ、ポー (ボードレール訳)の短編や、M. パニョル<お父さんの手柄>、<お母さんのお城>、サンテグジュペリ<夜間飛行>、ユゴー<レ・ミゼラブル>のいずれも抜粋、『千一夜物語』の少年版など多彩で、いまは趣向を変えて旧仏植民地だったカメルーンの作家の小説が結末に近づいています。



10年以上参加しているメンバーの龍泉寺由佳さんは「予習は担当部分の単語を調べてゆくだけ、復習などしたこともない劣等生ですが、やさしい諸先輩方による手取り足取りのご指導のもと、楽しく学ばせていただいております。海外脱出もなかなかかない私にとって、現在フランス語との接点は第1木曜の井土邸のみ。細々ですが、文法や熟語をある程度覚えているのも、読書会のおかげと感謝しています。お勉強の前後に、バイタリティあふれるメンバーの皆さんの近況やフランスのお話を伺うのも楽しみのひとつです。」と語っています。(M. I 記)

# フランスからの便り

世古由里子

皆さんこんにちは。南仏プロバンスよりお便りをしています。高速道路の脇に無造作に植わっているアーモンドの木にも、花が咲き初めました。桜によく似た薄いピンクの花びらです。庭の苺の苗からは、小さなつぼみの束がほっこりと顔を出しています。赤い実のなる姿を思い浮かべながら胸を膨らませている今日この頃です。



生まれ育った三重県を出て、エクサンプロヴァンスに来てから22年が経ちました。毎日、マルセイユ近郊の数ヶ所の学校で日本語を教えています。

今回『フランスからの便り』をというご要望があり、なにか皆様にお伝えできるものはないかと考えました。朝夕の通勤途中で車の中で聴くラジオのニュースや夕刻のテレビニュース、巷のうわさなども含めて、私が見聞きした最近のニュースの中から、気になるところをお伝えしたいと思います。

## その1 『英雄と違和感』：

夜8時の全国版テレビニュースです。“Mesdames, Messieurs, Bonsoir (皆さん今晚は).”「今日もまた、フランス人兵士が一人死亡しました。これで今年に入って5人目です。」と、番組は今日のトップニュースから始まります、そのあとは、暫く厳粛な雰囲気の中で兵士の死亡に至った経緯が伝えられ、故人と遺族への哀悼の言葉でこのトピックスが締めくくられます。数分後には、全く別のニュースを伝えるアナウンサーは、笑顔でコメントをし、“je vous souhaite une excellente soirée. (では、皆様、素敵な夜のひと時をお過ごしください)”といつもの調子で番組が終了します。これが、昨今のフランスの日常ですが、戦争も母国の軍事介入も知らずに育った私には、大変な違和感と疑問が残ります。

フランスには、職業軍人がいます。その人たちは、自ら戦場（外国の内戦地帯やテロ組織の抑圧）に派遣されるのを覚悟で、この職を選んだのです。殉職した兵士の職位、年齢、氏名と共に必ず伝えられるのは、「二人の息子を持つ父でした」とか「10歳の男の子と2歳の女の子が残されました」といったコメントです。時には、遺児となった10歳ぐらいの子どもが、ジャーナリストの質問に対し、「僕のパパは、英雄です。いつまでも尊敬しています」などと答えるシーンもあります。全国の視聴者がみな心を痛めて聞いているに違いありません。

こういうニュースが、夕食時に連日報道されると言うのは、異常ではないでしょうか。重い気持ちで考えをめぐらせているうちに、中学か高校で習った、与謝野晶子の詩が思い出されました。「ああ、おとうとよ、戦いに君死にたまふことなかれ」これは、百年以上も前に雑誌『明星』に発表され、当時物議を醸した反戦の詩です。現代のフランスには、与謝野晶子のような姉や母、家族はいないのでしょうか。

## その2 『真昼間、銃撃戦の起きる町』：

マルセイユ市でも仕事をしている私は、ニュースにこの町の名が出ると聞き耳を立てます。先日も、“Mesdames, Messieurs, Bonsoir.”に続き、「またもやマルセイユで、麻薬組織の抗争と思われる銃撃事件が発生しました。昨年暮れから、18人目の死亡者です。今朝8時半、刑期を終えた26歳の男性が、刑務所の門を出たところを数人の男に銃撃され…」と続きます。日頃から、コル

シカ島やマルセイユの組織抗争の防止と治安維持は、フランス国の政治課題でもあります。麻薬密売者達の報復劇に市民が巻き込まれたり、警官が撃たれたりすると、即座に内務大臣や政府の代表が現場を訪れます。そして、被害者の家族や同僚の手を取って遺憾の意を表明し、「国として事件の解明に全力を尽くす」と宣言します。

この日は、夜の全国版ニュースで、中学生の女の子が「若い男の人が、刑務所の門から出てきたと思ったら、それを数人の人が取り巻いて銃を連発したんです。すごく怖かったです。」と目撃した事件の様子を語りました。犯人がまだ捕らえられていないこの事件で、未成年の目撃者が、報道陣のインタビューに答えている姿も、わたしの目には異様に映りました。しかし、マルセイユでなくても、高校生が校門の前で麻薬を買っているとか、普通のサラリーマンが、家の中で自家製の大麻を作るために植物を育てているなどということは、ここではそれほど驚くべき出来事ではありません。「微量ならいいんじゃないの」と言う人もいるようです。

マルセイユ方面を車で走っているときに、後から無理な追越しをかけて来る凶暴な車（運転手）に出会うことはよくあります。速度のことは言うまでもなく、急な車線変更や中抜き、割り込みはよくあることです。そんな車が近寄ってくると、私は「麻薬中毒者かも知れない。凶暴になっているかもしれない。来るな！近寄るな！」と祈りつつ、その車が遠ざかっていくのを待ちます。場合によっては、少々の当て逃げなら、早く逃げて行ってもらったほうが無難です。ひどい運転に抗議しようと車から降りた途端、数人に殴られ入院したという話も聞いたことがあります。車の接触事故ぐらいでパトカーがやってくるはずありません。自分の身は、先ず自分で守るしかないのです。日本のように、電話一本ですぐに駆けつけてくれる駐在さんもここにはいません。普通けが人のない事故は、当事者同士が、事故の現状証明を作成します。それに双方が署名をして別れ、後日保険会社に届け出ます。

警察官達は、軽い自動車事故よりも、もっともっと重大な事件のために走り回っているのです。

## その3 『牛頭馬肉』：

今年に入ってから、フランスを皮切りにヨーロッパ各地で、食肉流通業界の詐欺事件が摘発されました。名のある冷凍食品メーカーや大きなスーパーで売られていた冷凍の調理食品ラザニアなどの中から、馬の肉が検出されたのです。牛肉と表示されていた肉の中に馬肉が混ざられていました。牛肉よりも安い馬肉入りのひき肉を、フランスの業者がルーマニアから買っていたことが発覚しました。この事件でフランスの消費者が受けた衝撃は、イギリスの場合ほど甚大なものではなかったようですが、国境を超えたヨーロッパ全体の食品流通のシステムの信頼性が大きく揺るがされた事件でした。その後も、食品表示の偽造スキャンダルは芋づる式に摘発されているようですが、この事件のおかげで、あまり知られていなかったフランスの馬肉消費や食用の馬を飼育している農家の仕事がテレビで紹介されました。

## 短信 3/19 島田進氏が郷里で講演（尾鷲市）



「パティシエ」という言葉が日本で市民権を得た現代洋菓子界の草分け的存在である島田進さん（東京麹町<パティシエ・シマ>シェフ、<ガレット・デ・ロフ・くらぶ>会長、仏農事功労章シュヴァリエ章受賞者、三重県紀北町出身）の講演会が3月19日尾鷲市の公民館で開催されました。招聘したのは東紀州雇用創造推進協議会。『パティシエのうまいもん探し』と題した講演で島田さんは、40年間日仏で食にたずさわってきた経験を踏まえながら、素材選び、とりわけそれぞれの地方の特色ある食材を生かすことや、子どもの味覚教育などがいかに重要であるかをユーモアを交えて話していました。